ここに注目　沖縄戦中のひめゆりの生徒の服装

「ひめゆり学徒隊」というと、どんな姿の人物を思い浮かべるでしょうか。その人物は、どんな服装をしていますか？戦時中の女学生ということで、防空頭巾をかぶり、もんぺをはいているかもしれません。上着は何を着ていますか？どんな履物を履いているでしょうか。

本稿では、沖縄戦中のひめゆりの生徒たちの服装について紹介します[1]。沖縄戦中の服装には、当時の社会や生活、戦争で追い詰められていく様子など、生徒たちがおかれていた状況がよくあらわれています。

ひめゆりの生徒たちの姿は、戦争直後から現在まで、映画や演劇、ドラマ、マンガ、イラストなど、さまざまなかたちで表現されてきました。それらのなかで示されるひめゆりの生徒たちの服装は、沖縄戦中の実際の生徒の服装とは異なっていることが多いようです[2]。その違いも意識して、当時、生徒たちが身につけていなかったものについてもまとめました。

※以下、ひめゆりの生徒たちの学校である、沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校はそれぞれ、「女師」、「一高女」と略記します。

もんぺともんぺの上着

1945 年 3 月 23 日夜、ひめゆりの生徒たちは、沖縄陸軍病院に動員されました。安里の学校から南風原の陸軍病院へ向かうとき、生徒たちはもんぺを着ていました。もんぺは、ズボン状の作業着で、自分で縫って作りますが、古い着物などを解いた布地を使うため、それぞれ違った色や柄のものを着ています。物資不足は深刻で、男物の着物を更生して使うこともありました。

上着は、多くの生徒が「もんぺの上着」を着ていました。もんぺの上着は、もんぺと同じように古着を更生して作った作業着です。「もんぺ」とは、本来、下にはくズボン状の服のことですが、生徒たちは、古着を活用して作る作業着という共通の特徴を捉えて、「もんぺの上着」と呼んでいました。もんぺの上着は、衿部分が着物のような打ち合わせになっていました[3]。【図 2】

【図 1】沖縄戦中のひめゆりの生徒の服装一覧

頭	・防空頭巾：紺の布地。裏は古着を利用して作る
上衣	・もんぺの上着：古着を更生したもの ・軍支給のシャツ：陸軍の襦袢。詰め襟・カーキ色
下衣	・もんぺ：古着を更生したもの ・軍支給の袴下：陸軍の袴下。カーキ色
履物	・軍支給の地下足袋：布製ゴム底。二股または丸いつま先 ・運動靴：布製ゴム底。黒。普段履いているもの ・軍靴：革の編上靴。貰ったり拾ったりした
かばん	・救急鞄：布製。自作の肩掛け鞄。救急袋ともいう ・リュックサック：布製。自作
着がえ	・もんぺ、もんぺの上着 ・制服：大切に持っていた

支給品の襦袢と袴下

南風原の陸軍病院に到着後、生徒たちに軍のシャツとズボンが支給されました。生徒の証言では、「軍服」と表現されることもありますが、実際に支給されたのは、陸軍の襦袢（じゅばん）と袴下（こした）で、本来は、軍服の下に着るものです。どちらも薄手のやわらかい布地で、薄いカーキ色でした[4]。シャツは詰め襟です。シャツとズボンは男性用で、生徒たちには大きすぎるため、袖と裾を何度も折り



第２展示室　生徒の服装

【図 2】防空訓練　1943 年度　（戦争前）



右端手前の 2 人の生徒に注目。左の生徒は、もんぺ、もんぺの上着、防空頭巾を着用（動員時と同様の服装）。右の生徒は、運動服、もんぺ、三角巾を着用（普段の作業時の服装）。沖縄戦では右の生徒のような白い服は避けられた。もんぺは、古着（主に着物）を更生して作るため、それぞれ違った色柄のものを着ている。着こなしに個性が見られる。

曲げて着用しました。支給された時にこのシャツに着替えた人が多いようです。【図 1】【図 5】

救急鞄とリュックサック、防空頭巾

陸軍病院へ向かう生徒たちは、救急鞄（救急袋）を持ち、防空頭巾を着用していました。どちらも、沖縄戦になる前から空襲などに備えて日頃から携帯していました。救急鞄は布製の小さなショルダーバッグで、斜めがけします。救急鞄も防空頭巾も自分で縫って作りました。救急鞄は古着を利用して作るため、色柄はそれぞれです。防空頭巾は、外側の布は紺色ですが、内側の布は自分で準備した古着などを使って作っています。【図 1】

生徒たちは、着がえなどを入れたリュックサックも持っていました。リュックサックもそれぞれが準備した布で制作します。古着を使うことも多かったようです。

素足に運動靴

学校を出るとき、生徒たちの多くは、黒い運動靴を履いていました。紐のない布製のゴム底靴です。靴は入手が難しくなっており、穴を繕って履いている生徒もいました。靴下は履いていません。靴下も入手困難で、日頃から素足に運動靴か下駄[5]を履いていました。【図 3】

支給された地下足袋ともらった軍靴

南風原の陸軍病院では、軍のシャツ、ズボンとともに、地下足袋が支給され、生徒たちはボロボロの運動靴から履き替えました。地下足袋は、ゴム底で、つま先が二股に分かれたものと、分かれていない丸いものがありました。地下足袋も生徒の足には大き過ぎたようです。雨のなか、飯あげなどで丘の斜面を移動したりするなかで、早々に壊れてしまった生徒もいました。【図 4】

軍靴は、革製の編み上げ靴で、兵隊が履いていました。生徒には支給されませんでしたが、戦場での 3 か月の間に、壊れるなどして履物を失った生徒は、親切な人に貰ったり、拾ったりして履いている場合もあります。軍靴もサイズが大きいため、歩きづらく、靴擦れをおこしました。軍靴は、

【図 3】運動服（戦争前）と運動靴



1942 年度の一高女 2 年生。沖縄戦以前の運動時の服装（沖縄戦の時には着ていない）。白い開襟の半袖シャツとブルマ。ハチマキは、おでこを覆わない巻き方で、運動時に着けていた。運動服は掃除や作業時にも着用した。



【図 3】部分拡大。運動靴がやぶれ、足の指が見えている。すでに靴が入手困難となっていた。靴でなくてもよいときは下駄を履く生徒も多かった。

【図 4】袴下と 2 種類の地下足袋（戦場で着用）



コザ収容所のひめゆりの生徒ら。1945 年 7 月。戦場で着ていた軍の袴下（ズボン）と地下足袋を身につけている。



【図 4】部分拡大。地下足袋は、つま先の形が 2 種類あった。

歩くとコツコツと音が鳴るため、静かに行動したいときには不都合でした。【図 5】

制服

生徒たちは、制服の上着を荷物に入れて大切に持っていました。卒業式のためにと、普段は着用していなかった制服のスカートを持っていた人もいます。当時の制服は、セーラー服ではありません[6]。女師は、国が制定した「婦人標準服」甲型二部式二号が制服となっており[7]、一高女は、全国の高等女学校で統一されていたへちま襟の制服で、冬服はどちらも紺色でした[8]。【図 6】【図 7】

解散命令後、生徒たちは荷物を減らして壕を出ますが、制服を救急鞄に入れて最後まで持っていた生徒は少なくありません。戦場を逃げ回るなかで、いよいよ最期の時が迫ったと感じて制服に着替えた生徒もいます。亡くなった生徒に制服を着せることもありました。

校章

校章（徽章）は、もんぺの上着や、軍から支給されたシャツなど、着用している上衣に着けていました。大切に荷物に入れていることもあります。沖縄戦当時、師範学校の校章は全国統一のもので、布製、黄色を基調とした桜の形の刺繍でした。【図 8】【図 9】

鉄かぶとをかぶって伝令に

南風原での飯あげや、南部撤退後の伝令など、壕の外に出るとき、生徒たちは、日本軍の鉄かぶと（鉄帽）をかぶせてもらっていることがあります。鉄かぶとは、南風原の陸軍病院では支給されていないため、ほとんどの生徒は持っていません[9]。借りたものを使っています。

衣服も地下足袋もボロボロに

生徒たちは、動員時に着がえは持っていたものの、ほとんど洗濯できず、お風呂にも入れないため、服は汚れ、傷んでいきました。頭には黒いシラミが湧き、服の縫い目には、白いシラミがずらっと並んでいました。砲弾の破片に当たるなどして大けがを負うと、服は、血だらけになるだけでなく、裂けたり破れたりします。大けがをして服がボロボロになった学友に、自分の服を着せた生徒もいます。戦場で服は貴重なものとなり、雨に濡れて干していた服が無くなることもありました。

解散命令後は、多くの生徒が荷物を減らして壕を出ました。着がえは持たなかった生徒は多いですが、服を重ね着して持ち出した生徒もいます。海岸で大波にのまれて、もんぺが脱げてしまった後輩に、重ねばきしていたもんぺを分けてあげた生徒もいました。大波は、地下足袋や防空頭巾、救急鞄などもさらっていきました。

【図 5】軍靴と地下足袋



米軍に収容された日本軍の捕虜。ふたりはそれぞれ軍靴（左）と地下足袋（右）を履いている。左の人物が着ている軍の襦袢と袴下は、ひめゆりの生徒に支給されたものと同様のもの。1945 年 6 月 17 日米軍撮影。沖縄県公文書館蔵写真「資料コード：0000112313、写真番号：12-54-1」の一部。

【図 6】女師の制服（上着）



第2展示室資料。1943（昭和18）年度から女師は婦人標準服が制服となった。スカートは儀式の日のみ着用し、普段はもんぺを穿いた。

【図 7】へちま襟の制服（一高女生）



1941年度の新入生から、女師、一高女ともに、全国統一のへちま襟の制服となった。女師は1943年に全学年が標準服に変わったため、これ以降は、一高女生のみが着用した。写真は1942年度の一高女2年生。

地上戦の 3 か月の間に地下足袋も壊れてしまうことがありました。履物を失っては行動できないため、亡くなった学友の地下足袋をもらって履いた生徒もいます。地下足袋が壊れたり脱げたりして、裸足で海岸の尖った岩場を逃げると、足に大きな痛みをもたらしました。残ったゴム底を包帯で足に巻き付けようと試みた生徒もいます。

白は敵から見えやすいので着てはいけない

沖縄戦のとき、生徒たちはもちろん、陸軍病院で働く看護婦たちも白い服は着ていません[10]。沖縄戦が始まる前から、白は敵から見えやすく目立つため着てはいけないとされていました。

ひめゆりの生徒が白いシャツを着ている写真は多く残されていますが、それらは、沖縄戦になる前の写真です。生徒たちは、学校生活のなかで、白い運動服をよく着ていました。運動服の上着は、白い開衿の半袖シャツです。【図 2】【図 3】体操の授業や、運動、農業実習、掃除のほか、勤労奉仕や陣地構築などの動員作業のときに着ていました。運動服をいつ頃から着なくなったのかは、はっきりしません。

【図 8】女師の校章



布製。1943 年度から全国の師範学校で統一されていた。

【図 9】一高女の校章



ハチマキは巻いていない

沖縄戦中、ひめゆりの生徒はハチマキもしていません。沖縄戦になる前の学校生活のなかでハチマキをしていたのは、運動会や、球技や陸上の練習や試合のときです。運動時に使っていたハチマキは、白い無地のものでした[11]。【図 3】日の丸や文字などは入っていません。防空訓練や避難訓練の際もハチマキはせず、防空頭巾や三角巾をかぶっていました[12]。【図 2】

赤十字のマークを身につけていない

生徒は、赤十字のマークの入ったもの（腕章など）は身につけていませんでした。陸軍病院の看護婦も同様です。沖縄戦のあいだ、沖縄陸軍病院は赤十字のマークを掲げておらず、敵から病院とわかる表示はしていませんでした。

説明員　仲田晃子

1　本稿は、主に元ひめゆり学徒隊生存者の手記や証言をもとにまとめた。書籍や展示などで公開されているもののほかに、当館が所蔵する未公開の音声、映像、手記などの資料も用いた。それらの戦争体験記録のなかから服装に関する部分に当たり、ひめゆり学徒隊の服装の全体の動向を把握した。沖縄戦以前の服装については、戦前に発行されていた校友会誌『姫百合』のほか、戦後に刊行された『ひめゆり―女師・一高女沿革誌―』などの同窓会の刊行物、ひめゆり学徒隊以外の同窓生の記録も参照した。また、当館所蔵の戦前の写真や卒業アルバム（当館蔵）、米軍撮影の写真や動画（沖縄県公文書館所蔵）にも当たった。また、2024 年 3 月から 4 月にかけて、元ひめゆり学徒の仲里正子に、聞き取りや確認などで協力を得た。

2　本稿のきっかけのひとつは、ある書籍に掲載するひめゆり学徒隊を紹介するイラストについて、当館の学芸員が意見を求められたことだった。よく調べて描いたことがわかるものだったが、同時に、調査の対象が、映画やマンガ、イラストなどの視覚表現のなかで描かれてきたひめゆりの像であることもよくわかるものだった。この例に限らず、流通するイメージへのアクセスの容易さと比べて、これまでに、調査研究の成果や博物館の展示は参照されづらい傾向にある。あらゆる表現のなかで、服装を事実に照らして再現する必要は必ずしもないが、調査で明らかにされてきたことと、表現されたものとの齟齬が、沖縄戦やその体験の認識に影響する懸念があり、調査・研究成果の公開や普及は課題となっている。

3　もんぺともんぺの上着は、1942（昭和 17）年に政府が提案し着用を推進した「婦人標準服」の乙型活動衣の下衣、乙型二部式の上衣と同様のもの。女師・一高女（ひめゆりの学校）では、婦人標準服の制定以前の 1939（昭和 14）年の夏から着用が始まっている（「鍛錬期間日記抄」（源武雄編『姫百合』第 15 号、姫百合会、1940 年、p39-65、沖縄県女子師範学校、沖縄県立第一高等女学校『卒業記念寫眞帖』1940 年 3 月など）。婦人標準服については「新らしくできた婦人標準服」（『週報』第 287 号、情報局、1942 年 4 月 8 日）など。その総体に関する研究として、横田尚美「婦人標準服の変容―婦人雑誌と服飾雑誌を資料として」（『社会文化史学』第 60 号、2017 年）がある。

4　米軍が撮影した白黒の記録写真や映像には、軍服よりもより白っぽく写っている。生徒のほかに、防衛隊（県内で召集された兵隊）も、襦袢と袴下を着用している。

5　生徒たちが「西郷下駄」と呼んでいた薩摩下駄。杉材で、鼻緒は手作りした。なぜ鼻緒を手作りしたのかは、はっきりしない。1939（昭和 14）年頃から素足や下駄履きになっている。

6　セーラー服を着ていたのは、1944（昭和 19）年 3 月卒の一高女生が最後。

7　1943（昭和 18）年度から。

8　写真では師範と一高女とでは制服の色味が多少異なっていることが確認できる。新調した年によっても違いがみられる。布地の違いによるもの。

9　津嘉山の第 32 軍司令部経理部で支給されたとする記録もある（宮城喜久子『ひめゆりの少女　十六歳の戦場』高文研、1995 年、p44）。どの程度の生徒が支給を受けたかは、はっきりしない。

10　長田紀春、具志八重編著『閃光の中で』ニライ社、1992 年、p58。当館の奥松文子への聞き取り（2011 年 11 月）ほか。

11　当館所蔵の写真によると、白以外にもう 1 色あるが、競技などのチーム分けに使ったものと思われる。

12　1943（昭和 18）年頃。それ以前の防空訓練や避難訓練の服装については未詳。陣地構築のときにハチマキをしていたことがあるかは、はっきりしない。